

動力車新聞 第1429号 「主張」・批判 その1

ブル・トレ式裏切り路線を弾劾する



82.7.30

No. 1109

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五(六)公衆(局)三三二七〇七

「ブル・トレ」の「主張」を弾劾する

動労「本部」は、7月21日付『動力車新聞』(第一四二九号)の「主張」欄で、ブル・トレイン 運転検査係乗旅費のさかのぼっての全額返済に応じた大裏切りを正当化し居直る、許すまじき反 動的な「主張」を掲載した。この「主張」こそ革マルの路線そのものであり、敵の攻撃に屈し組合 員を裏切ったばかりか、臨調・国鉄当局の先兵となって全ての国鉄労働者を売り渡して恥じない超 反動的居直り路線の表明である以上、われわれは黙って見すごすわけにはいかない。裏切り者「動 労「本部」革マル」に弾劾の嵐を叩きつけ、動労からの一掃をかちとろうではないか。

「主張」こそ革マル路線そのものだ!

「主張」は、「ブル・トレ」問題の教訓を全体のものとし、攻撃に直対応することなく突き進もう」という標語 からして、実にあらゆる居直りと組合員へのドウカ ツに終始している。そして、まず冒頭から「実際には添 乗しないで支払われていたのだから」と書き出し、また 「民間と比較して働きの悪さ」「赤字の国鉄で働かな いで手当」という当局の言葉を借りて「実は「本部」革 マル自身の積極的な主張だ!」文中くり返しくり返し強 調することによって、ブル・トレ旅費は「ヤミ手当なの だから」「返済するのは当然」なのだ積極的に主張して いるのである。当局の立場に立って組合員の不満を押え てまわる、という彼らの方針こそ、実はあの「働こう運 動」路線の真髄だという事がよくわかる。

さらに許せぬことは、国鉄4組合共闘の中で、「当局 のブル・トレ旅費返還要求に対しては裁判闘争でも闘う」 との強い確認をし、各組合員への指導をしてきていたに もかかわらず、6月30日深夜になって突然、動労「本部」 が一切の機関の検討もなく、「全面返済する」と転換し、 そのとたんに今度は当局や鉄労と一緒に「国鉄を口 汚くののしていることである」。

「攻撃に直対応するな」と組合員をドウカツ

許せないことには、この裏切りに対する当然の組合員 の動揺・怒りを見こして、「この間の経緯からして必らず しも十分なる意志統一ができていない面もあり、ともす れば「一体中央本部は何を考えているのか」という不満 や疑問が生まれかねないといえる。…」とぬけぬけと 言っている、つまるところ、組合員の不満は「返済とい う方針上の誤り・裏切り」からくるのではなく、「意志 統一が十分のため、組合員の認識が足らず、誤ってい るから生ずるのだ」と問題をすりかえた上で責任を組合 員に転嫁しているのだ。全く、言語道断の居直りだ!

組合員の不満や怒りの方こそが当然であり正当である。 実際に6月30日付(//)『動力車新聞』(第一四二七号) の段階においても、例えば新潟地本・長岡運輸所支部か らの「運転検査旅費「戻入」拒否」と題する職場報告記 事は、何度も職場集会を開き、様々な不安・不満をも出 し合って討論し「最終的に:退職者四名を含み全員が統 一して「戻入」拒否で断固闘いぬくことを確認しあい」、 当局、鉄労の「戻入が当然」という攻撃に抗して「国鉄 組合員とともに「戻入」反対・労組破壊粉碎をめざし、

支部組織を挙げてたたかう」と決意と報告を伝えている。

動労「本部」革マルは、長岡運輸所支部組合員のみならず全国の必死で闘っている動労全組合員を裏切った上 に、革マルに対する組合員の怒りと批判を、ドウカツに よって押さえつけたことを、「主張」の中でとくとくと 語り、「このような(革マル式組合支配の)やり方を評 価し、教訓化して、もっと徹底してやろう」と言ってい るのである。

「返済するかしないかは問題ではない」というペテンと居直り

「主張」は言う。:「中央本部の考え方を理解した か否かではなく、現在かけられている攻撃に対する情勢 認識と運動の進め方において意志統一することができた からであり、その教訓こそ大切にしなければならぬ」と。つまり「旅費を返済するかしないかなど」というこ とは問題ではなく:と、(返済を強要した今になって この攻撃の決定的重要性をことさらにインベイスした上で、 しかし、口とは裏腹に松崎一派が実際にやったことは、 (当局との信義上「返済させることが決定的に重要だ」と松崎一派は信じこんでいるが故に)全力を挙げて組合 員を「勝てない」「闘うな」とドウカツしてまわり、返 済を強要してまわったのである。何と組合員を愚ろうす る恐るべきペテンであることか!

ブル・トレ旅費問題で肝心かなめの最重要なことといえ ば、一点「返済するか、それとも返済拒否で闘うのか」 のいずれの立場をとるのがまさに決定的に重要な分 岐点なのだ。それは当局自身の口からも「ブル・トレ旅 費問題へのかかわりこそ今後の国鉄再建の成否をうらなう 試金石」と表現されているように、まさに「当局の立場 に立って共に国鉄再建にまい進するか」それともそれ を拒否して「いかなる攻撃をうけようとも、自ら既得権 を返上していくような立場はとらない」との労働者の立 場を堅持するのか、の思想性のかかった決定的な分岐点 を意味するものなのである。

だからこそ、このブル・トレ問題での動労「本部」の裏 切り・転落以降、全ての事案にわたって、公々然とした 「当局「鉄労」動労革マル」連合の構図が定着してい くのである。 動労「本部」革マルの「ブル・トレ旅費返還」「現協廃 止攻撃受け入れ」の重大裏切りを徹底的に弾劾し、「働 こう運動」路線もろとも、粉碎・一掃していかなければ ならない。(以下続く)